

第九編 名勝旧跡観光

一、慈眼寺公園

谷山電停から慈眼寺行きバスがある。春は桜、秋は紅葉、夏はソーメン流し、冬はチャンボ、これは公園の人気のものである。奇岩怪石があたりを囲む中を清き水が流れて滝をなす所、すなわち稻荷神社の地が、その昔日羅が開いた寺

の跡、後世の補陀山慈眼寺の跡でもある。

慈眼寺には百済の僧といわれる日羅の作、観世音が安置されて、藩主島津久豊・貴久・家久・斉彬公などは特に信仰があつたが、明治初期の廃仏毀釈の厄やくにあつた。

観音堂、後世の補陀山慈眼寺、観音立像高さ四尺日羅作、年号不明（文政年間谷山諸記による）観世音仏像、観音堂ともに廃仏の難にあつて今はない。正八幡宮、昔は社殿があつたが今は石塔で文字もない。弁財天、蛇隊、由緒不明、今はない。仁王、観王堂前の石



橋、及同橋再建の石碑。慈眼寺磨崖碑、及同橋再建の石碑。

慈眼寺磨崖碑、享和二丁酉元九月一日。疱瘡大明神像、明治十八年酉十月五日。虚空蔵、文政四奉造立□□慈眼寺現住竜眼叟。家畜大明神、石灯笼一基。薩摩国谷山家畜大明神。蚕大明神。伝芭蕉像。(儀翁碑)、屏風岩北側の崖下にある。慈眼寺十二世、大雪白峯和尚墓、

勅願真禪師慈眼十二世大雪白峯和尚(表面)

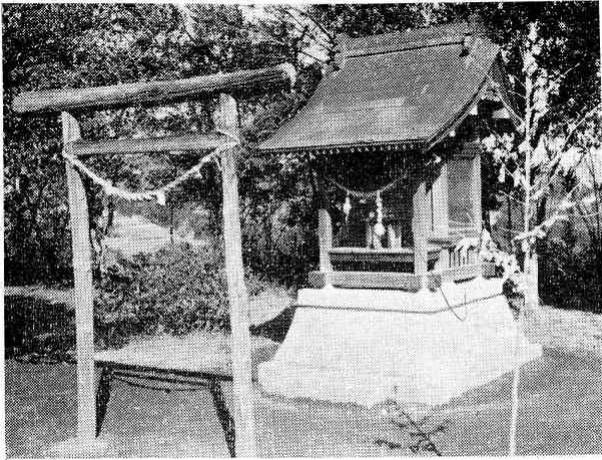
諸岳山総持寺一万五千三百五十二世薩州指宿庄川畑苗□(裏面)。鉄心竜眼像、文政十二己丑二月二十九日、行年



七十一歳。二十二世大定常禪大和尚の墓。石疊喜捨碑水神祠、錢五百文、四元作兵衛、酒屋伸助、石疊喜捨現住元皓、明和四年丁亥正月吉日。磨崖仏、正面右より三連一基、二連二基、一連一基、年号不明、名前は隠刻で妙心、妙守、道喜、妙允、山翁、妙参、孝順、道賢とある五輪塔。薩摩板碑二基、宗咲妙香、永喜。板碑、黒字で記し下部は蓮弁が陽刻してある。墨書上部は空風火水地、下部は戒名が不明。

○心空風火水地、昌□□□上座、○心空風火水地、□窓□□□□□。首なし仏像。稻荷社崖下に仁王像及

天照大神。記念□、供養塔。内屋敷部落の稲荷山並に伽藍山は古の慈眼寺の境内で稲荷神社はここにあったのを今の所へ移されたのである。伽藍山に「門前中家内安全□□超宗代」の石塔がある。超宗は廃仏毀釈当時の僧といわれる。



稲荷山の上に懐良親王を祭った谷山神社があり、これが撰社に谷山五郎隆信が祭られている。神社の西隣に鹿兒島宮林署苗畑営業所があつて松杉檜等の苗木や造園用、盆栽用の美しい苗木も育てられている。また、護国神社の近くには寿光園がある。

二、清泉寺跡

下福元町草野にある。如意山清泉寺といつて川辺宝福寺（俗に山の寺という）の末寺で曹洞宗、本尊は磨崖仏阿弥陀像、坐長約二・七メートル、百済くだらの僧日羅作といわれ、坐像の横に彫られた建長三年の文字は鎌倉時代を示している。開基は日羅とし、中興の開山は応永年中覚に和尚で廢寺は明治初年の廢仏毀釈である。

今、清泉寺跡には覚に和尚以下の墓、磨崖仏、五輪塔群、庚申塔経塚、阿に金剛力士像、磨崖劔（宝劔磨崖）などが多く残っていて

古の寺院の体制を知ること出来る。また島津大和守久章と其の家臣の墓碑はありし昔をしのぶものがあるので次にこれが概要を述べると

島津大和守久章は大隅垂水の領主島津貴典の始祖、島津忠将から六世の孫忠仍の第四子新城屋敷の始祖である。人となり強悍勇力絶倫であつた。島津光久の時、宝永年間罪を得て川辺山の寺に謹慎を命ぜられ、ついで遠島をいいつけられたので、新納久親と市来家尚のふたりが寺に行つて命を伝えた。久章は命を奉じて鹿兒島におもむく途中、久章の家臣三次が堂尾坂で久親に斬つたので久親は之を捕えてさし殺した。

これを見た久章は罪が自分に及ぶことを恐れて清泉寺に退いた。久親は五日過ぎて死んだ。そこで物頭の三原右衛門を清泉寺につかわし久章を誅せしめることになつた。

久章大いに精神を上げまし、刀を振つて出たので三原は士卒が傷つくのを恐れて山にかくれ、人をして呼ばしめ、命をつたえた。そして久章が客殿にとび出たのを見て矢を放つて彼が股をつらぬいた。久章がおこつて、庭に出ると再び矢を放つてついにこれをたおした。久章は年三十一。正保四年十二月十一日久章の家は除かれた。

今和泉郷岩本村に大和神社があり、祭神は島津大和守久章で疱瘡の祈願に靈験があるとされている。同神社の境内に「府学助教宮下希賢、明和九年重建、岩本村大和大明神」と石碑に漢文で詳しくしるされている。

付記、坊津の一乗院、金峰山も日羅を開山とし、また熊本大分大阪など多数の寺院や仏像がある。

三、和田浜、久津輪崎、七つ島

和田町の中に和田、和田浜、和田名の三つの地名がある。この和田なる語源は海の神、綿津見神わたつみのかみの綿に基づくものとされる。それで和田は海辺の意で漁獵をもとにくらしていたがそれが漸次山手に移り入り農業に従事するようになり、これらのものを和田に対し山門やまと（音読して山門さんもん）ということにな

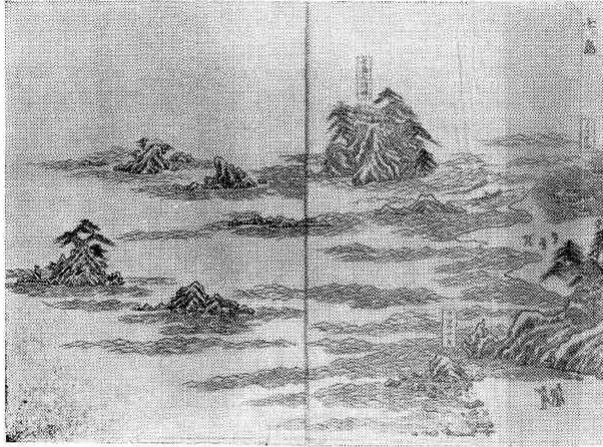
つて、文字も山門、山人、大和、野馬台やばだい（音読して野馬台やばだい）を用いてあるが意味は皆同意である。谷山では和田名、坂之上あたりのことを山門といい、この地方の人々を「山門衆」などととなえていた。

（小谷部著日本及日本人の起源と
白柳秀湖著日本民族文化史考みさき）による。

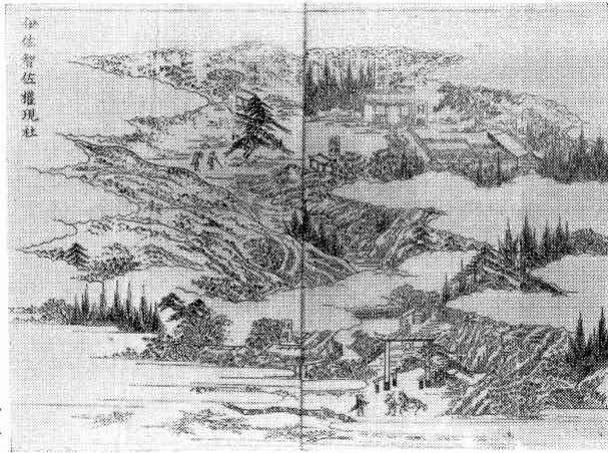
久津輪崎は干拓以前は細長い岬が海中につき出していたので、干拓はそれを基盤に施されたものである。あたりには真砂まごじを用いて白灰しろへ（石灰）せきわい焼きが盛んであったので、そのため真白い美しい砂浜であった。

十月十九日（昔は陰曆九月九日）伊佐智佐神社の大祭には久津輪崎への海下りの祭典が催されてにぎわう。この久津輪崎は郷土史家福平尋常高等小学校平瀬武二校長の研究による興国三年懷良親王が錦旗をひるがえし上陸の地であるとされている。

久津輪崎から七つ島は一直線の砂浜で、砂は砂鉄を多く含むので昔



三 和田浜、久津輪崎、七つ島



は鉄山へ運ばれたことがある。七つ島は、大小七つの島からなつて一番大きな島には青い松もはえており、市岐島の神をまつる石祠がある。薩摩の歌人八田知紀翁に左の歌がある。

ちはやふる神やとりけん七つの子の

その石なごのなれる島はも

春は桜島と大隅の連山をながめながら潮干狩り、夏は海水浴がさかんににぎわう。

文久三年薩英戦争の時、英七艦隻は往復とも、この七つ島沖に停泊したので、わが軍は草野の丘の上に遠見番所を設けてこれを監視し、七つ島一帯の海岸の松林に兵を集めて上陸を待ったが彼らはこれを知ったのか、出ていった。

四 征西將軍懷良親王記念碑

記念碑は上福元町御所ヶ原一名見寄ヶ原にある。南北六十六間東西百間余東北部は見寄谷の絶壁、他は隍^{かむり}をめぐらした要害の地である。北部の谷間に御所の井戸があり、今も昔ながらに湧いている。懷良親王は興国三年五月一日薩摩津に着き続いて谷山御所に入り賊徒平定に従うこと六星霜、正平十二年までこの地にお過ごしになった。

征西將軍宮記念碑は靈地御所跡に大正十二年建設された。碑文は次の通り。

神聖遠く国を肇め統を垂れ万世一系金甌無缺にして宇内に冠絶するものは則ち我が国体なり此の大本や万古動揺すること無し但た運に泰否あり時に治乱あり天歩艱難の事なき能はず後醍醐天皇の時不幸否運に属し乱離相踵き皇子皇孫咸な事に勞し或は軀を以て皇猷に殉せらるるに至る。

征西將軍懷良親王の九州に於る亦何ぞ終生勞勤の甚しきや初め親王の欽派せらるるや谷山隆信感奮して先ず斯地に奉戴し駐留六星霜を閲し給へり親王尚ほ年少文武の講習も嬉戲も亦この地に於てせらるる親王在天の靈永く斯土を思慕し給ふや知るへし乃ち谷山九州勤王首倡の遺跡たり誰か来て觀感興起せざる者そ有志為に相謀て碑を谷山福元に建て後人をして長へに芳躅を仰がしむと云ふ。

大正十一年十二月 大勲位公爵 松方正義

谷山城懷古

塩谷温作

(谷山市助役竹下一雄氏)
(蔵書による)

擁護親王拳義兵(親王を擁護して義兵を拳)

南風不競事難成(南風競わず事成難)

寒煙落日苔碑面(寒煙落日碑の面)

留得尽忠千載名(留め得たり尽忠千載の名)

記念碑除幕式に際し 鬼丸壮次郎

のちの世の人も仰がむ日のみ子の みあしの跡にたてし石ふみ

五 菊池城址

菊池城跡は御所ヶ原との間に見寄谷をはさんだ北の台地で、西方は「あおい」が岡がそびえている。南北東の三面は深い絶壁の谷ですこぶる要害の地と見うける。菊池武光(武重であろうとの説にかたむいている)が、懷良親王を

守護し薩摩にくだりきて賊の平定にあつたとする城址である。「あおい」が岡の麓にはこの城で用いた井戸があり水神祠に元治二年丑十一月吉日福島氏建立とある。

六 谷山城址

谷山城はまた、千々輪ヶ城といい、俗に本城と称する。武者溜より上段まで拾耆間、武者溜より下人居所まで拾参間、総高式拾四間、武者溜四方相回る。上段東西式拾間、南北拾五間、ただし、西の方切通しより総回り五百六間など谷山諸記にあるが、今も武者溜、下人居所、上段など明瞭に認められる。(昭和四十一年現在)

しかして上段の地に愛宕神社、(長野武蔵坊勧請) 山の中腹に伊勢神社(伊勢兵部少輔貞昌勧請) がある。

当城の城主は初め、

- 一、寺山出羽守とあるが年代は不明。
- 二、谷山郡司、谷山家世々の居城となり、谷山隆信は征西將軍懷良親王を谷山御所に迎へて忠誠を励げんだが、応永四年忠高に至り郡司職を除かる。
- 三、応永二十四年伊集院頼久が当城に拠り島津義久に反したので義久自ら兵を率い之を攻め囲み、頼久防ぐこと能わず降をこう。許されて地を献じ恩を謝して伊集院へ帰る。

四、大正七年六月出水の領主島洋夷久、谷山を奮い当城に拠る。天文八年三月十三日島津貴久之を親征し、当城主榎寐播磨守が軍を紫原に大破するに及び、山田苦辛城主平田式部宗秀も降を乞い貴久を城に迎う。貴久兵をつかわし本

城を守らしむ。

当城の外城として、弓場ケ城、陣之尾城、茶臼ケ城、洩水ケ城等がある。

七 陣之尾城址

〔碑陰刻銘〕延元元年九月後醍醐天皇ノ皇子懷良親王征西將軍ニ任セラル当時国内擾乱セリ親王勅命ヲ奉シテ薩摩ニ入国アラセラルヤ忠節勤王ノ士贈正五位谷山郡司谷山五郎隆信是ヲ千々輪城ニ迎ヘ奉ル時興國三年五月ナリ錦旗城頭高ク翻リ外城陣之尾ニハ精兵充滿シテ親王ヲ護衛シ奉リ為ニ宮方ノ勢大ニ振ヘリ親王後ニ御所ケ原ニ征西府ヲ置キ九州ニ号令セラレ初メテ薩隅日三州鎮定セリ星霜ココニ六百年矣ニ由緒ノ地ナリ即チ碑ヲ建テ城址ヲ顕スル所以也
昭和三十二年三月吉日

題字、從四位勳三等 伊地知四郎謹書

從七位 安田敬藏謹撰

谷山町郷土史研究会代表者 黒木弥之進建之

八、見寄の遺跡

見寄部落は御所原・菊池城跡の東北下の平地で、両遺跡との間は急な坂道でつながっている。通常、谷山五郎隆信の墓といわれるものが、阿弥陀あみだがおかヶ岡といわれる小高い山の上にあつて、誰かの供養くようのための祠ほこらであることは分るが、

七、陣之尾城址

谷山五郎隆信のものとして断定することは出来ない。祠の中に板碑があり（高さ約一メートル幅二十七センチ）阿弥陀如来の梵字がある。

祠の南面

永宝 戊 □□六〇年霜月吉日 午

願主名越千右衛門 奉建立者見寄村 覚右衛門

□□之石 女房 □ 始 右子 宗右衛門 右姉

正面高六四センチ、上巾二二センチ、下巾二四センチ 側面 上巾二二センチ、下巾二三センチ

板碑四号（小）石質軽石 梵字三字 正面高五八センチ、上巾一八センチ、下巾二三センチ 側面上巾一五センチ、

下巾一八センチ

梵字は、京都仏教学字学齊藤教授によれば鎌倉中期を下らないものとのことではあるが、谷山家との関係は不明である。なお、此の板碑群の隣の道脇に一つの梵字のある石がある。

祠裏面 作者中納長右衛門 本田鏡音坊

2 ニケンドン供養塔群

板碑一号（大）石質安山岩 正面高 一五八センチ、上巾三二センチ、下巾四二センチ 側面 上巾四〇センチ、下

巾四七センチ

板碑三号（中ノ二）石質安山岩 正面高八〇センチ、上巾二六センチ、下巾三三センチ 側面 上巾二二センチ、下

巾一六センチ

板碑三号（中ノ二）石質軽石梵字一字

九、皇立寺跡

板碑群から東約百メートル位の地を寺ヶ宇都と称し、皇立寺の跡とされるが、あたりは総田地になり周囲は雑木林で清水が湧いているだけのことである。宇都の入口にある高さ五十九センチの牛馬頭神は、明治以後のものである。

十、神前城址

神前城は玉林城とも記され、また俗に和田城、権現城とも呼ばれている。和田町伊佐智佐神社の地である。北を大手口と称す、西にからぼり隍あり東は海に臨む。高さおよそ三十三尋びょう縦百間横七拾壹間周囲九拾壹町、大永のころ出水の城主島津実久・谷山・川辺・加世田・高尾野・阿久根・水引等を領し、天文八年春三月その家臣谷山駿河守、伊集院山城守、松崎丹後守、河野太郎左衛門等をして神崎城を守らしむ。時に河野太郎左衛門、島津貴久に款を送り城中に自殺する。島津貴久、天文八年三月十四日苦辛城及本城を納め神前を攻めんとするに当り、谷山駿河守等三月十四日降る。実久川辺に退く。（谷山城、苦辛城）

付記

1 ススメ塚

九、皇立寺跡

当城の麓、和田小学校の北方たんぼの中に高さ三間回り百間程の大きな岩石で囲まれた所があつて昔は一丈一尺余りの大きな松があつて、あたりに風光を添えていた。この地を「ススメ塚」または「滑石」ととなえる。ススメは雀の意と言ひ、また島津貴久が神前城攻撃の際にこの地で部下に「進め、進め」と指揮をとられた意であるともされている。

2 宇宿城址

神前城の南方に引続き、双方二丈ほどの掘落とし土手があり、上段二町とある。

3 伊佐智佐神社の旧鎮座の地

宇宿城に続く西の方を五之原といつて、この地が伊佐智佐神社の旧鎮座の地で同地は風害多大のため現在の地へ遷座せんざし奉つたとのこと、今、そこには当時の社家、原口家歴代之碑がある。なお当時は境内に馬乗馬場もあつたとのことである。

十一、波平城址

波平城は上福元町刀工で名高い波平泉の北方の平岡である。「興国三年八月五日より七日の間、北朝康永元年（一三六一）島津貞久谷山郡司谷山忠高を討んとして鹿児島より軍を督して此城に陣す。給黎、知覽、川辺、別府（別府は加世田の別府）の兵力を忠高に合す。忠高軍旅を整へ来て貞久の陣を攻む。貞久防ぎ戦ひ負傷する者多し。而して忠高の弟祐玄一隊を領し牛落（中郡宇村）に屯し鹿児島との通路をたつ。貞久の陣頗る危急なり。此時に当り、和泉

右衛門尉忠直援兵を率して牛落の敵を破り駆せて当陣に至る。故に貞久軍を収めて鹿兒島に還ることを得たり。「この波平城地は団地住宅地として目下建設中である（昭和四十一年現在）」

十二、椿山城址

波平城の北方、中町にあり。内城と称す。応永二十四年島津久豊、本城（千々輪ヶ城）の敵伊集院頼久を攻めんと軍を率いて鹿兒島を發し波平に至る途中、山田、中の間一人の通行者を見ず、久豊伏あるを疑い此所に壘を築き兵を置き伏に備へ本城を攻めたりと云う。

十三、苦辛城址

山田町にあり、大永七年出水の領主島津実久谷山を奮い平田式部宗秀をして当城を守らしむ。天文八年三月十三日島津貴久之れを親征し紫原に至る。宗秀降を乞い貴久を迎へ当城に入れ、而して本城を攻めたりと云う。（谷山城参照）

十四、川口城址

五か別府町川口、宮川小学校の東南方にそびえる山に築かれた城である。応永十七年（二四一七）伊集院頼久（伊集院の領主）が島津九代の久豊に叛き当城に拠つたが久豊に攻められ敗れたと。宮川小学校の西側の小高い所を陣ヶ岡と言い陣太鼓をたたいた所と言う。また、同校庭の一部は射場の跡で今その記念碑が建っている。

十五、皇徳寺跡 山田町皇徳寺部落

征西將軍懷良親王谷山御所隣に国土靜謐を祈り皇立寺を建立、正平二十一年、無外円照和尚この寺を山田村へ移し開山し永谷山皇徳寺と称す。開基施王は谷山五郎隆信の子平忠高入道仏心大禪伯。懷良親王の位牌を安置す。



るか、石塔はあまり古くは見えない。

薩藩神社仏閣調書によると福昌寺の末寺となり、寺高百石とあり尚、当山の末寺は伊集院、久木山破鞋庵。谷山潮海山・円明庵、瑠璃山・多福庵、松風山・江月庵、明白山・昌寿庵、大浦山・帝釈寺、智福庵、雲竜庵、大智庵、梅林庵、推雲庵、養徳庵、観音寺、花翁軒寺、金剛、願寿庵、福寿庵、五有庵、大通庵、

皇徳寺跡北方ほど近い所に八木殿屋敷跡があり、現今田中氏の所有となつている。八木家は系譜に「第三代盛重（安芸守）薩州下向伊作堀之内村、五町五反、谷山中園村二町二反、西別府村四町知行」とあり、錫山鉦山発見に出てくる。宇宿村農民宇平は八木元信の領民ともあるので八木屋敷と確認されている。

十六、岩下の浜

今から五百五十数年前、応永二十年（一四一三）十二月島津久豊が渋谷氏をうって吉田にある時、伊集院頼久がそ

むいた。この時下大隅、向島の軍が谷山に会し向島の軍船が岩下浜についたとあり、（西藩野史）また岩下の山の崖壁には船の上から書いた文字があったともあるので昔この岩下は船つき場の一つであったことが分かる。

木之下橋を渡つて慈眼寺方面にゆく道を今は慈眼寺道路というが昔は浜田道となえたことなども海浜を意味したものとと思われる。今の二軒茶屋あたりを昔は「牛落」又は「牛懸」といつて、この地は干潮をまつて往来したとい、又新川に沿うた唐湊は唐船の出入に基づいた地名であるとされている。なお、下大隅は今の垂水、新城地方、向島は桜島のことである。

十七、烏帽子嶽

谷山市の最高峯（五二一）で長野武蔵坊によって世に知られ、川辺、山の寺宝福寺の開山覚禪師も一時身をこの山に寄せていたと伝えられている。麓の第一鳥居から約四軒で絶頂に達し烏帽子嶽神社がある。祭神は須佐之助命と、手力男命、撰社は猿田彦命である。古来軍神として（第四編第一章参照）参拝者が多い。例祭は春秋彼岸の中日である。

古来平川、五位野、古屋敷、和田、下町、塩屋などは漁業の地で、大小多くの漁船があるため、これを利用する素人釣りも多い。夏は「キシ釣り」秋は「イカヒキ」がさかんで獲物を潮で洗いサシミとし、飲む酒の味は格別とされている。

十八、波平刀匠の遺跡 上福元町波ノ平

1 波之平刀匠之碑

十七、烏帽子嶽

「我薩尚武ノ風兵器ノ鋭ト相俟ツ一修天皇ノ朝大和ノ刀匠橋口正国来リテ谷山ニ住シ波平行安ト称シ技ヲ伝ヘテ明治前記六十四代安行ニ及ビ時ニ御劍ヲ鍛ヘ名作国宝トナルアリ仍業績ヲ頌シ遺跡ニ表ス」

昭和十五年庚辰二月 皇紀二千六百年記念 谷山町史跡顕彰会

右波平刀匠遺跡北方、笹貫井戸は波平刀匠使用の井戸で記念碑がある。

2 寿庵松の碑 下福元町坂之上西部落

三国名勝図会に曰く、近古石見守安張、安張寿庵と号す。壯歳松齡公に從て朝鮮軍中に役し、刀を造て將士に給す。凱旋の後寛永十九年死す。大和守安行此安行は安張の外孫にて安張の養子となる本府刀匠丸田伊豆守正房と名聲並び振る。(以下省略)

寿庵松の碑

余生来武運ヲ好ミテ劍ヲ賞ス特ニ薩摩刀ヲ探究ス因リテ県ノ内外ニ之ヲ求メ頗ル良刀ヲ集ムルコトヲ得タリ会々紀元二千六百年祭ヲ迎ウル当リ各地ノ波之平刀蹟ヲ顕彰セント志シソノ資ヲ遠ク県外ノ友人諸彦ニ徴シ之ヲ五ヶ別府笹貫波平清見寺坂上ノ五ヶ所ニ配分シ各地方ノ有志ニ建碑ノ協力ヲ求メタル所進ンデ協賛ヲ得相前後シテ尽ク完成ス。

また十年前落雷ノタメ枯死シタル寿庵松跡ニ昭和十五年二月十一日谷山長谷山神社宮司ソノ他有志ト共ニ第三代目ノ稚松ヲ植樹ス是新寿庵松ノ碑文ニ我祖大脇為随云々トアルヲ以テ余ソノ志ヲ継ギタルモノナリ後世亦枯死セバ誰カ相繼イデ植樹シ以テソノ名ノ万古ニ朽ケザランコトヲ欲ス。

武士道ハ永遠ニ伝ラン寿庵ノ松

谷山郵便局長 正七位勲六等 大脇為明

今の寿庵の松碑の西隣約二十米位の畑や道路には鉄滓がありまたその隣「羽子^た夕」の井は刀造りに用いられたもの、またその西「山河内」に橋口家は居住している。(昭和廿一年記)

十九、三条小鍛冶宗近碑

五ヶ別府町三重野ニアリ。世ニ伝フ三条小鍛冶宗近流サレテ薩ニ在リ初メ大和ノ刀工橋口正国「初代波之平行安」来リテ刀ヲ此地ニ鍛フ宗近就イテ学ヒ奥秘ヲ伝ヘ赦後帰洛シテ御劍ヲ鍛ヘ天下ノ名匠トナル時ハ円融一条ノ御宇ニ係リ事ハ三国名勝図会及薩隅日地理纂考ニ詳カナリ。

皇紀二千六百年記念会従七位木藤長誌

昭和十五年庚辰三月 谷山町史跡顕彰会

三条小鍛冶宗近は正国が弟子なり。大宮記曰

宗近は従四位下播磨守橘大仲宗といひし、法興院殿に仕へり天元二年九月廿九日の夜、木工寮の仕丁稲丸を闇討にせんとしたる科に因て、同年十一月薩摩国へ流罪す。三重野に居れり、谿山の正国に師とし事へ鍛冶を業とし、名を宗近と改む。永祚元年五月赦免ありて帰京し、洛東白川に住て、名劍多く造れり。

法興院は諱は兼家東三条と号す。一条三条二帝の外祖にて摂政大政大臣たり、永祚二年七月二日薨すと「拙記譜石」等に見えたり。又「崇劍工記」曰宗近は橘姓播磨守仲遠が長男、小橘大仲宗といひし、東三条殿下の使人なり。天元

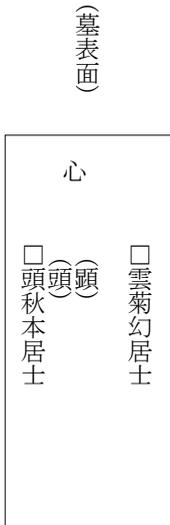
二年九月木工之寮の稻丸と鬮論の科に因て薩摩国へ流罪せらる。三重野といふ所に住せり。谿山の刀鍛治正国に鍛法を習ひて刀匠となれり宗近と改む。永祚年中赦免ありて帰京す。洛東白川に居れり。一条天皇の御剣を造り奉る。名譽の良工なり。



二十、小伝次の墓

中町滝下部落にあり。(俗に小伝次の墓と言われているが実は三郎五郎、並びに千次郎兄弟の墓である。小伝次の墓は始良郡富隈城跡にある。

滝下のいわゆる小伝次の墓碑には、



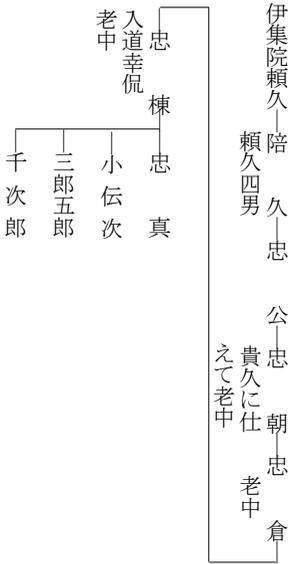
八月十七日

同碑の台石の人名には、下中園八郎、藤原藤□□□、水俣源大良

鬼丸太右衛門、中能口次右衛門、背八、甚兵衛
 上中園 長助、西園、喜平左門、下園、右衛門
 川野 断七、大園、小左衛門、 / 休右衛門
 中咄合八右衛門、前島、次兵衛、下園、佐右衛門
 大同山右衛門、鮫島、作左衛門、 丸衛十門
 内屋敷源八、右同、勘兵衛、西門、金右衛門
 下中正右衛門、竹脇、長右衛門、東園、層、小右衛門
 岩永平馬重次 原口肥前守

正徳二年八月老日

略系図



二十、小伝次の墓

忠棟後入道して幸侃、北隅を領し祖父以来三代国老に任ぜられる。はじめ豊臣秀吉入寇の際、人質として羽条秀長の營に入り秀吉に知られ後徳川家康、石田三成等と交るに及び遂に非望を抱き領主島津忠恒を毒殺し本家を奪わんとす忠恒之れを知り伏見に於て殺す。

其子忠真都城にありて乱を起し忠恒に攻められ各地に転戦するに及び家康の仲裁により和議なり居を帖佐に置いたが其の母肥後に入り加藤清正に援を求めしも許されず空しく帰る忠恒又之れを知り忠真を日州野尻に於いて殺した。之れ慶長七年八月十七日である。同日弟小次郎は竜伯（義久）の召に応じ富隈に至る途中浜市に於いて殺される。

また三郎五郎（仙次郎ともある）は阿多にあつたが惟新（義弘）に召されて鹿兒島に至る途中谷山掛橋坂下に於て誅せられた。忠真が母および祖母（幸侃が母）も阿多にいたが、家臣安楽四郎左衛門等のすすめによつて自害し、四郎左衛門等も家を焼いて共に死んだ。阿多にこれらの墓がある。

二十一、伝説 豊臣秀頼の墓

木之下にある豊臣秀頼の墓といわれているものにつき、寛政十二年庚申六月、時の御記録奉行本田孫八郎の調査の結果を文政十二年頃記された谷山諸記に次の通り述べられている。

○福本村木ノ門名頭屋敷内

一、塚木松壱本目通壱丈三尺まわり。この塚木は天保七年六月大風にて倒れ取除く。この松は昔、木下藤吉持ち来り植えたものという。右の松の下に古い墓があつて、道清禪定門と銘がある。

○右同村福留門名頭屋敷内

一、古塔 高さ八尺五寸、午方仏像・子方衣冠之像、壱基、彫刻があるが、文字は霜くずれのため不明である。

右の塚木松より壱町ほど東方に地の神と申し伝え、霜月一度ずつ祭りをするが由緒は分らないとのことで、寛政十二年庚申六月御記録奉行本田孫九郎殿、塔下深さ壱丈ほどお改めになったが何の誌もなく、墳墓の体にも見えないから「地之神」と心得よと指示し、なお、之につき由緒など尋ねる人には右の趣を答えよといわれたとある。以上によつて按ずるに「地之神」とするが正しいのではなからうか。

註保七年とあるは天明七年の誤りか天保は文政の後の年号で、天明は寛政の前の年号である。

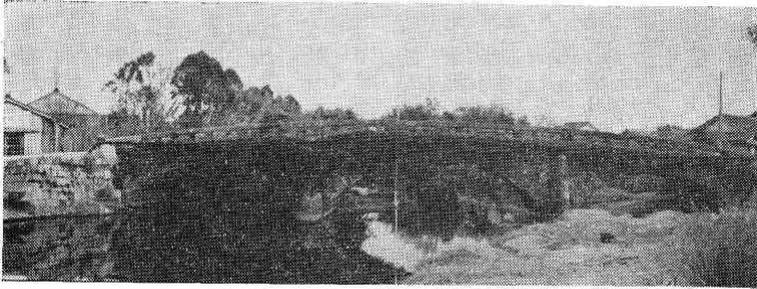
二十二、地頭仮屋

1 慶応元年五月地頭仮屋の拡張工事があり、西南役で焼失。

2 仮屋馬場。仮屋馬場とは今の市役所通のことで本馬場（今の国道筋）から西馬場に至る間延長一九三・五メートルである。

3 仮屋の境内。本門の左右は棟石のある石垣造りで延長一一三・五メートル、高さ二・一二メートル、他の三面も石垣で囲み北方に裏門があった。境内は杉、楠、柞、孟宗竹などが茂っていたので森山といい、ことに「森山尋常小学校」が建てられた俗に「仮屋学校」と呼ばれていた。

石造の門をはいると、右側に 嚙（年寄横目などの詰所があり、左側に門番所があり、地頭仮屋本館は今の小学校玄関より二十八メートル位の北方の地と推測される。前庭の西側に井戸（つるべがあり、かたわらに□の面積一・四四平方メートル高さ一・二メートルの非常用石鉢二個が備えてあった。今、小学校の門入って右側にある老木の柞は西南役の悲惨を物語っているものである。



- 4 木馬場。馬場とは武士が調馬の場所の意である。本馬場は南は仮屋馬場の出口から北は常楽寺までの間である。
- 5 射場。弓や鉄砲（銃）の調練場である。多福庵の隣にある。「射場の猪俣殿」の宅地がそれであると伝えられている。
- 6 射場岡。上塩屋にある射場岡で横約九〇メートル縦三〇メートル高さ約二〇メートルで浜砂で造られている。主として大砲の標的場である。天保十二年（一八四一）家老島津久風が洋式砲術試験安政四年（一八五七）百五十ポンド砲試射の標的場とされているので、砲弾や銃丸の破片も見つかっており近くにある煙硝蔵（火薬庫）はこの時も使用されたことは明らかである。
- 7 柏原神社境内につづく北方の台地、即今の団地住宅のある所であった。百姓の納めた籾を貯蔵した倉庫である。
- 8 馬駅（次、継）
今の永田部落に架けられている、石の眼鏡橋のことで、あたりは谷山の宿場であるが施設など不明である。
- 9 御狩場と鷹小屋。御鷹場は浜田道（今の慈眼寺道であるがやや北方にあたる）にあつて狩猟用の餌などが貯蔵されていた。鷹小屋は坂之上にあつて鷹を飼育し

ていたと伝える。

10 吟味場。機密事件の吟味場であるため面積も三反歩以上の地とされ二か所であった。一か所は仮屋馬場古垣殿どんの隣、他は山下殿どんの隣とだけで場所は分らない。

11 関狩。次の由来記にある通り谷山で行なわれ、錫山の御の御仮屋でも年一度ずつ催されているので原文のまま左に掲げる。

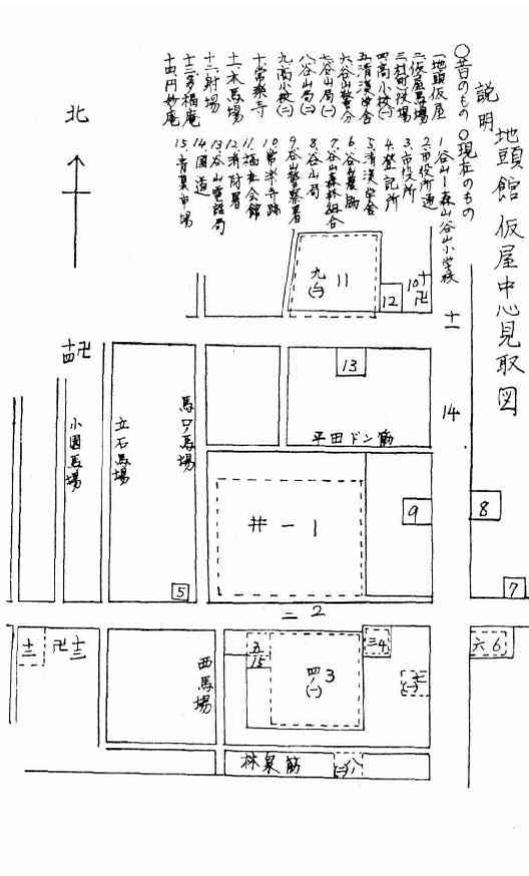
一、維新様中納言様朝鮮御帰陣候御寺沢志摩守殿宇久大和守殿称五島於朝鮮御懇意之儀有之右ノ御礼鹿兒島へ御見廻之節被召列候人数江江五島踊サセラレ被入御覽候就而右之為御返礼ト御家関狩於桜島御野張行有之候為被御馳走由申伝候古老説ニ黄門様御代ニ暫く関狩中絶有之候ヲ光久公御代島陣之以後御再奥被成由候

一、右御関狩為御旧例御与行被遊御事に御座候右関狩場所之儀最初者吉野原有之候其後吉野伊集院春山又谷山野桜島原ニ而有之候尤寛陽院様泰清院様大玄院様御三代共ニ数度御登被成候琉球王子被召列見物為仰付事モ有之候
右関狩御馬追者軍事之余風ニ而御関狩ハ御出陣之御作法御馬追者御帰陣之御作法ト中伝

12 候戸長役場。戸長制度は明治五年発足、同二十二年市町村別の施行により廃止さる。この間、明治十一年町村編成法により行政事務担当者と共に村落共同体の代表者ともなり、その後官選となり、官僚的性格を濃くし、初期の村落代表的性格を失った（郷土史辞典）当時谷山には五ヶ別府・山田村・中村・上福元村・下福元村・和田村・塩屋村・平川村の八か村の外松崎町があるが戸長役場は上福元村に、一箇所が戸長も一人で兼務であったことは当時の戸長役場の公印に「上福元村外八村戸長役場印となっている。仮屋は明治五年戸長役場となったが西南

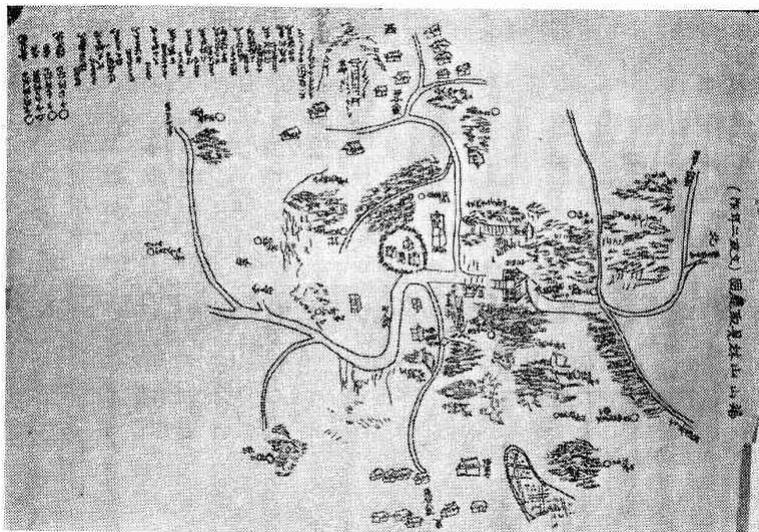
役で焼失したので戸長役場は現在の鹿児島登記所の地に設けられ、同二十二年村役場と改称せられた。

13 谷山関係の兵児歌一つ。腕は谷山力は出水とぼろとぼろと吉野山



二十三、錫山手形所跡

錫山中御手形所(区内では御座と称す)は当初東谷「御座元」の地にあつたが、その後(年代不詳)今の谷山農協



手 形 所

山支所のある所に移転、明治維新以後錫山鉦山事務所と改称せられた。御手形所には錫山詰金山奉行、同書役同横目（後中ごろからは御徒日付等が勤務していた。現今の日本赤十字社錫山診療所の北側の道路の地を「高札元」と呼んでいるが、ここは山中の諸々の掟もうもろが表示おきてされた所である。

（付御蔵跡）

錫山山中用米穀と、金属錫が保管される倉庫のあった所で、当初は今の日赤診療所の東側の地であったが、弘化元年十二月隣接の床屋の失火にあたり危険を感じたので直ちに谷山農協錫山支所のある地に移転され明治三十五年まであった跡である。この倉庫には年七百五十石の米が、田布施高橋よした下倉くら（後の常平倉）から続けられていた。

二十四、岩屋御仮屋跡

下福元町岩屋今の大迫、帖佐両氏の宅地内の畑地である。昭和の中ごろまでは記念の椿つばきがあつたが今はない。

島津貴久公大永七年（一五二七）六月十六日朝鬢石髪の手

入をなし出度、日添を経て岩屋に入り河内を過ぎ田布施城に帰られた。これが貴久公が岩屋入りの始めである。その後、貴久公は加世田鹿兒島の往復はいつも岩屋を通ることにされたので、ここに仮屋を設けて休憩の場所にされた。この仮屋は貴久公に次ぎ義久公義弘公、光久公の四代の間であつたが、年一度の関狩は多数の武士によつて行なわれた。(関狩については谷山地頭仮屋欄参照)

貴久公はこの岩屋は伊作、田布施、川辺の境にある重要な地であるから、行司を置き、白石四郎右衛門これに任せられた。白石家は代々この職で明治維新に至つた。なお、御仮屋の前を流れる岩屋川に、伝説にある稚兒ヶ滝こゝろがあつて、今は鉱山の製錬につかわれている。

二十五、権現ヶ尾岳と錫山相撲



権 現 像

大崎県道芝奥ヶ野間の景色は車をとどめてみたい美しいものがある。さらに、その北方にそびえているのが谷山第二の高峯(四人四・五)権現ヶ尾岳で、奥ヶ野から登れば八合目に権現堂がある。この権現堂ははじめ慈眼寺の北、滝之川に写真に示す仏像(始は二体であつたが今は、一体)が安置されて横町、木之下、玉利、木屋宇都に信者が多く、六月十一月の各十三日に権現詣ごんげんもちをし、六月燈を行なつた。明治の中ごろ滝の川から胡摩平岡こまびらおか、次いで現在の地あしむへうつし

まいらせたと。三角点のある絶頂よりは鹿兒島湾は脚下に薩隅兩半島はもとより南に遠く屋久島、西に東支那海に浮



奥ヶ野から鹿兒島湾をのぞむ

かぶ甌島、東北に熊本宮崎の両県の一部まで望みうる雄大な景色である。また、鬢石^{びん}もじきそこに見えて、島津貴久公が鹿兒島から田布施に至るコースも思い見ることのできる。

錫山相撲は毎年十月十九日に催される大山祇神社への奉納相撲で、鉾山発見以来三百有余年つづいていけるもので、好角家と観客で土俵の周りを埋めるほどである。昭和三十七年十二月には横綱柏戸以下の土俵入りでにぎわった。この土俵の近くに錫山鉾山と、これに伴う幾多の史跡があり世に知られている。

二十六、鬢石

所在 谷山市下福元町鬢石 高六尺三寸廻二丈五尺三寸凹みの回り四尺ばかり、深さ七寸五分、巖石は玄武岩、七、

八月の旱天と虽水絶ゆることなし、以て奇異とす。

島津美久夙に非望を抱き、密かに面策する所ありしが、今や貴久公の勢力牢乎として抜くべきからざるを見寧ろ兵力を以て領国を奪わんと慾し、先づ加治木地頭伊地知周防守重貞、帖佐地頭島津下野守昌久を使喚して兵を挙げしむ。二人即ち美久に覚し、各城によりて叛けり。

日新公之を聞き自ら行ないて之を征せんと欲し、大永七年六月五目加治木に赴けり。是の虚に乗じ、美久川上上野守を遣はし、勝久公に説くに伊作籠居の非を以てし、速に鹿兒島に入りて守護職に後世んことを懲遷す。勝久公意動けり。美久勝久公の承諾を俟たず、同月十一日出水、串木野、市来等の兵を率いて、さきに勝久公が日新公に与えし日置、伊集院を攻めて之を陥れ、又加世田、加児、山田の兵を遣はして谷山を隠れ、一挙して鹿兒島を襲はんことを企てたり。日新公にさきに加治木帖佐を平定し、各戎将を定め、守備兵を置き地利を察し、帖佐加治木は



鬢石

鹿兒島の藩屏として枢要の地なれば、往く往くは勝久に勤めて居をここに移さしめ、緩急相助けて長久の計をなさんなど、将来の計画を打案じつ、船に乗じて漸く鹿兒島に近づき將に戸柱の岸に着かんとする折しも、小船数隻頻りに往来して事の急なるもの、如し。日新公之を怪しみ其の故を問糺し、始めて実久の謀計を知り大に之を憂へ我二心なきこと天地神明識る所なり。速かに伊作に行き勝久公に見えて赤心を明さんと云へりしが、左右危害の身に及ばんことを恐れて之を諫止す。日新公止むを得ず、陸に上り、谷山より伊作湯越嶺を踰えて、直に田布施城に入れり。時に実久の党既に鹿兒島に充つ。実久人を清水城に遣はし貴久公に告げしめて曰く、「請ふ守護職を我に返せ然らずんば我將に武力を以て之を取らん」と。公の重臣伊集院大和守忠相等答へて曰く「汝武力を以て之を取らんとせば我亦武力を以て之を守らんのみ」と依て群臣を集めて之を議す。或は城を守りて禦かんと言ひ、或は寺に投じて之を避けんと言ふものあり、公之をききて曰く「身既に守護職たり、何ぞ妄りに寇を避け身後の恥を遺すべけんや、只一死以て城を守らんのみ」と。公年十四、衆孰も其の英邁なる氣象を驚歎せざるものなかりき。時に実久の党三百余人に及び、清水城の危機一髪に迫れり。園田清左衛門実明情を知り来り告げて曰く、「恐らくは倉卒の変あらん、速かに之を避くるに如かず」と。是に於て衆議一決す。六月十五日夜の月明に乗じて城を出づ。実明を始め山田伊予守、木脇大炊助祐兄、川越民部左衛門尉重実、長井善左衛門尉、鎌田筑前守政心、井尻九郎次郎祐宗の七士、並に乳母宇田氏之に従ふ。冷水の險路を越え夏蔭に出で、路の傍なる楓の葉蔭にしばし足を留め、夫より西の方小野村に走り、先づ園田実明が家に入り徹行の支度を調べんとす。賊徒五十騎追尾し来る、実明公を屋後の聖宮に入らしめ從臣等を山林中に匿す。追兵己に至り、実久に謂つて曰く「今夜貴久ここに入る、速に出せ、若し之を拒まば汝の家を搜索せん」と

実明白く「公は決して我が家にあらず、汝等妄りに之を疑ひて我が家を捜し、若し公を獲ざる時は我も又汝等を釈さざるべし。我に家臣若干あり、汝等に甘心する所あらん」と。辞色並に勵し、且曰く、「先きに六、七人犬迫路を尋ねて北に去りし者あり、汝等の尋ねる所は此の一行にはあらざるなきか」と。追兵等之を信じて馳せ去れり。かくて貴久公虎口の難を免れ、小野村行司役長谷讚岐を招きて案内とし清左衛門も一行に随ひて小野を發し、山間の径路を経て伊集院竹の山に入り。春山狩倉を過ぎ、伊作谷山の境なる柳ヶ谷に出で、登瀬岡着せる頃夜明け初めければ傍に巨巖の横はれるに腰打ち下ろして暫く休憩せり。則ち携へ来れる行厨を開きて朝餉を上り、乳母宇多氏巖の凹みに溜れる水を以て公の御髪に櫛を入れる是よりこの巖を鬢石と唱へ今も居然として四百年の昔を語れり。

(大正九年島津貴久公三百五十年祭に際し編纂の島津貴久公小伝による)

二十七、光山の由来

下福元町、光山部落にある。島津貴久公が伊地知重興が守る下大隅、今の垂水新城を征する時、一夜東から一塊の溜りが飛んできて、落ちたので水樽の百姓が捜して見ると光沢ある鎌かたであった。百姓がこの由を里長に告げ里長が官に申し出ると、この地を「光山」と名づけ、また、一社を創建し鎌を神体とし諏訪大明神を勧請した。例祭は七月二十五日。

二十八、山田一丁田の田の神

享保八歳霜月吉日 女相中

安山岩製の立像である。昭和三十年鹿児島県令第四十八号に基づき昭和四十一年三月十一日鹿児島県重要文化財と

して指定された。県道山田線の道筋にある。

二十九、谷山名物

谷山には、名勝と旧蹟が多い。既に述べたように、慈眼寺、清泉寺、七ツ島などの名勝はもとより、諸所に散在する旧蹟は、いずれも観光の資源でないものはない。また、谷山神社のある山の上から見た谷山市街の展望、錫山街道から見下した谷山市の展望、五位野の深港のあたりから眺める錦江湾、あるいは小松原の海浜など、まことに風光に恵まれている。なお、観光と共に逸することのできないのは、谷山名物である。

清見橋の下流にある木橋をはさんで、北側に谷山温泉センター、南側に長太郎焼窯元があり、製品は天下に名をなしている。

谷山は昔から、そば料理のさかんな所で二軒茶屋、五位野茶屋は特に名高いものであったが、今は重吉じゅうきちそばが名をきかしている。近ごろ谷山の「そばきり踊り」がテレビやラジオにとりあげられているのは面白い。又「そば」に替わって慈眼寺そうめん流し、平川そうめん流し「仁仙山そうめん流し」が進出しつつある。